

1. 強襲∞人攫い

父の書斎に呼ばれて馳せ参じたわたくしは、呆然と丸い頭を見下ろしていた。

赤と白で描かれた蔓と葉っぱのヴィンテージ絨毯。見慣れたそれは父のお気に入りで、額を擦り付ける為に存在している訳ではない。

わたくしと同じ色でありながら、白が入り混じっている髪の毛。

いつからこんなにも白色の割合が増えたのだろうかと、わたくしは信じられない心地でいた。

潤いが損なわれているように見えるのも、きつと気のせいではないだろう。

「すまない、すまない……!」

父はずっとこの調子で、わたくしに謝り続けている。

その姿は普段の飄々とした態度が嘘のように悲壮感で満ちていた。頬が痩けて、顔色が悪い。

ここ一週間ほどまともに家に帰ってきていたなかった父が、ここまで激痩せしているだなんて誰が想像するだろうか。

わたくしはただポカンと口を開けて、呆然としていた。

「うそ、ですわよね？」

つい今しがた耳にしたばかりの話が信じられない。まさか家が、誇り高き我ら伯爵家が——没落寸前『だった』、だなんて。

高貴な家に生まれたわたくしは、いつだって背筋を伸ばして気高く生きてきた。

同じであると信じていた父は、半年ほど前に多額の投資をした事業が、ついこの間まで好調だと言っていたのに。

先々月から突然雲行きが怪しくなつて、先月になつて急降下。投資先の企業が瞬く間に倒産した。

交わした契約によつてじわじわと利益を回収していくつもりが、大赤字。ほんの少しもお金は返つてこなかつたらしい。

父曰く資産運用のつもりで初めて、いよいよこれから増えていくぞ、というところで全てがパーになつたとのことだ。

そして負債はそれだけに留まらず、これでは駄目だと慌ててあれこれと手を出した結果——まるつと全てが、大赤字となつた。

信頼出来る筋からの勧めであつたのに悉く投資した企業が倒産や夜逃げをし、自分の目もとうとう曇つたかと意気消沈もしたとか。

負債は積もりに積もり、自信喪失もあつて最早領地を返上して平民に落ちるしかないと最近まで父は、追い詰められていたようだ。

——そう、これは過去形である。

父には既に、救いの手が差し伸べられている。没落するところ『だった』というのは、解決済みであるからこそその表現なのだ。

「そんなの、怪しすぎますわ！きつとあの男の罠だったのです！」
「いいや、違うんだ。全て私が悪いんだ……」

お父様は否定をするけど、話を聞く限りでは怪しいところが多すぎる。揃いも揃って突然の倒産や事業縮小や夜逃げだなんて、裏で誰かが糸を引いているとしか思えない。

「自分なら取り返せると思っていた。傲りとプライドのせいで、傷が浅い内に引き返すことが出来なかったのだ」

「……っ」

お父様はただただ自分を責めているようだ。

わたくしの話を聞いてくれない。

お父様のこんな姿、見たくなどなかった。

いつも軽口ばかりでちよつと軽薄なきらいがある父だが、それでも尊敬していたのに。急に老け込んだ姿で、娘に平謝りをしている。解決済みだと分かっているにもかかわらず。泣いてしまいそうだ。

「すまない、すまない……」

「……もう、聞き飽きましたわ」

ツンと顔を背けて、わたくしは腕を組んだ。

父が視界の端でしおしおと更に萎びるが——わたくしは焦燥感に襲われて、どうしようどうしようと頭を悩ませていた。

今しがた父から聞いた話。それはこれまでの経緯と、これからについて、二点の説明であった。

前者は解決済み。前述の通り困り果てていた父には救いの手が差し伸べられた。

貴族の当主が抱えた物凄い額の負債を、まるっと充填してくれる

人が現れたのだ。

そこで後者の『これから』の話に繋がる。

善意では済ませられない額を、負担してくれた人がいる。ではその人は、代償に何を望むのか――？

そう。その家の令嬢――つまりは、わたくしである。

よってわたくしは借金の肩代わりをしてくれた人に、嫁がなければならなかった。

確かに我が家の難は去った。しかしそれはあくまで、『我が家の』難はだ。

本来なら恩義がある方への嫁入りは、やぶさかではない。それどころかわたくしは貴族令嬢。家のために嫁ぐのは、当然であつた。

――しかし問題は、その相手だ。

（あの男だけは嫌なのにあの男だけは嫌なのにあの男だけは……！）

恩人なのに変わりはない。父を、この家を救ってくれて感謝をしている。けれどあの男だけは嫌なのだ……！

わたくしはハンカチーフを取り出して、ギリギリと噛み締める。どこかに嫁入りするとしても、絶対にあの男だけは無いと思っていた。

それなのにまさか、こんなことになるだなんて。しかしよくよく考えれば、あの男がこんなチャンスを逃すわけがない。

父が困っているのだって、すぐに察知して即座に手を差し伸べたはずだ。

——コンコンコンコン。

廊下に繋がるドアが忙しなくノックされている。

早く入れるとばかりの性急さに、わたくしは奥歯でギチギチとハンカチーフの生地を噛み締めた。

「ど、どうぞ！」

「お父様ツ!!」

「だってえ！」

親子が言い争う中、書斎のドアが開いた。

あっと思った時には、突風に見舞われる。ドツとこちらに風が押し寄せてきて、わたくしの腰にガシツ！と何かが巻き付いた。

「マイルスウィートハニーイイイ！」

「きゃああああっ!!」

目前に迫る、造形としては美しいのにどうしようもなく緩み切っている男の顔。

風で舞うきめ細かな長髪は金に近い薄茶色で、垂れ目がちな双眸は煌めく翡翠。左目の下にある泣き黒子はとつてもセクシーだ。

一見すると女性と見紛うようなとんでもなく整った美貌は、デレ

デレとしていて本当に締めまらない。

「この……っ！もうっ！」

咄嗟に逃げようにも、腰に腕が回されていて逃げられない。

光のような速さで迫られ、あっという間に正面から抱き締められたようだ。

鼻腔を擦るのはスツキリとした上品なコロンの香り。

密着した男性はとても良い身形をしているのに。だらしく開いた口の端からは、唾液が垂れていた。

じゅるっとヨダレを吸る音が耳に付いく。

「会いたかったよおおおおっ!! おおおん！ がんばりいいいッ！」
「イヤーッ！ 離してえ！」

お父様ー！と助けを求めるわたくしに、床に這いつくばったままの父がおいおいと泣く。

「すまない……すまない……」

「ふんふんふんふん。スーツハーツ、スーツ！ハーツ！」

「変態変態変態！触って良いなんてわたくし許可していないわっ！」
変態がわたくしの髪にやたら高い鼻を突っ込み、おいを嗅いでいる。

信じられない。街に出かける度にやたらと遭遇し、しつこく口説かれてきたが——こんな触れ合いは初めてだ。

「バッ、バラのお、香油のお、かほり……♡おほお……♡」
「気持ち悪いッ!!」

わたくしは変態のやたら厚い胸板を、右手でドンツ！と叩いた。
だってわたくしの髪をふんふんと嗅ぎながら、恍惚としているのだ。本当に気持ちが悪い。

この男の名前はセオドア。平民の、商人である。

性格は引くほどしつこくて粘着質。年齢は三十歳で、わたくしより八歳も年上だ。

幾度となく求婚を断ってきたのに、何度も何度も求婚伺いの手紙を送ってきた迷惑男兼、ストーカーである。

身分差があるので、とやんわり断っても無駄。貴方だけは嫌なのと直筆で断りの手紙を送っても無駄。本当にしつこく求婚状が送付されてきたので、わたくしと父はほとほと困り果てていた。

何が琴線に触れたのかは分からないが、セオドアはとにかくわたくしに懸想している。

そんな彼はわたくしとの身分差を埋めようと奮闘した結果——三十歳という若さで、お父上から継いだ商会を国一番にまで成長させてしまった。

その上『この方のことを心から愛していて現在求婚中です！』と

大々的にわたくしの名前を上げて回っており、そのせいでわたくしに来る縁談はゼロだ。もちろん、セオドアを除いて。

もう結婚適齢期終了間近なのに、この男のせいでわたくしには全然、殿方が近付いて来ない。

しかもこの男、どこから情報を収集しているのかわたくしが外出する度に姿を表す。どこに行っても「偶然、ですねっ♡」としなを作って近付いてくるのだ。気持ちが悪い。

「まあ、なるべくしてなったというか……」

「お義父上は反省なさってください。私の可愛いエンジェルを困窮させかけたのですよ。……まあ怪しいところが多いので、こちらで調査をしますが」

「やっ、触らないで！ 穢らわしい！」

腰をそろりと撫でられて、わたくしは反射的にペチンとその手を

叩いた。しかし悲しいかな、叩いた手の方が痛くなってしまった。

「重ね重ねありがとうございます……」

「フンフンフン」

「やあーッ！　いーやーッ！」

痛くなった手を両手で包み込まれて、やたらねつとりと撫で回される。そうしながらも、首筋に鼻を当てられてまた匂いを嗅がれた。

「んふん……♡しゅごい、えっちな、にいい……♡♡」

「……っっ！」

きつと感情が高ぶり、ほんのりと汗を掻いているからだろう。男はわたくしの汗のにおいを嗅いで、ほうつと幸せそうに息を吐いた。

「へんっ、たい……！」

バチン！と全力で頬を打つと、やっぱり手の平がジンジンして。

セオドアは叩かれたのに、デレツと嬉しそうに笑うだけだった。

結局その後、わたくしは長身の変態にひょいっと担がれた。

人のことをお姫様だのエンジェルだのハニーだの言っておきながら、荷物のように肩へ担いだのだ。信じられない。

じたばたと暴れても構わず運ばれ、哀れなわたくしは変態男に連れ拐われる。

しかし書斎から出ようとしたところで、父が彼にササツと書類を差し出した。そうして変態に、サインを求める。

チラツと見えたそれは婚姻の届け出で。わたくしはギャーツ！とはしたなく叫んで暴れたが、変態はエヘエへ笑いながら署名をした。挙式は大々的にしましょうね！と宣ってわたくしを運ぶ変態。

おとーさまー！と青空の下で響くわたくしの怒号——否、叫び声。玄関フロアから屋敷の外に出ると、後ろから父や母、それから状

況が飲み込めていない三つ年下の弟と、使用人達もゾロゾロと続く。
やわな貴族令嬢の体は暴れることには向いておらず、抵抗して
たはずのわたくしはスタミナ切れを起こしていた。

ダランと伸びていたところをやたらと豪華な馬車に押し込まれる。
「……っ！」

「おおっと、元気が宜しいですねっ！」

我に返って慌てて逃げ出そうとするが——横を擦り付けようとし
たところで、変態に捕まってしまった。

パタンと馬車のドアが閉まる音が聞こえる。

「きゃ……っ！」

「おおおうマイスウィートっ」

それでもどうにか逃げ出そうと奮闘していると、バランスを崩し
て座席に尻餅をつく。

すると心配げにわたくしを呼んだ男が何故だか正面から覆い被さ
つてきて、わたくしはあっという間に押し倒されてしまった。

ふかふかの座面に背中が当たり、背凭れとは反対側にある右足が
宙に浮く。

「はあっはあっはあっ」

「ひ……っ！」

カタリと音を立ててから、馬車が動き出す。

首を伸ばしてどうにか家族の方を身やると、母はヒラヒラとハン
カチーフを振って別れを告げていて、弟は首を傾げながらもそれに
習い手を振り、父は腕で顔を隠して泣いていた。泣きたいのはわた
くしの方だ。

「ま、まままままい、スウィート……♡♡♡」

「気持ちツ!! 悪い!!」

寄せられる顔を、右手で押さえる。

こんなに気色の悪い男なのに、触れた肌は良く手入れされていてスベスベのもちもちだ。余分な皮脂も無く、清潔感がある。

——ただし、こちらに向けてくる視線はとても粘着質で。お綺麗な顔にある口の端からは、ポタポタと唾液が溢れていた。

「き、きききす。キスをしまししょう私のお姫様。ちちちち誓いのチツスを」

「しないわ！絶対しない！断固拒否よっ」

ギュツと目を閉じてイヤ！と意思表示をすれば、はあはあとまた目の前の男の息が荒くなった。

彼の顔を押さえていた右手をあっさりと取られ、指の間に長い指が絡み付いく。

骨張っている、男性の手だ。ついドキリとしてしまって、それが

信じられなくて。わたくしは動揺してしまった。

「いいえ、します！ 貴女の唇、いただきます!!」

「きつつつ」

も。と続く前に、ぶちゅううと全力で口付けられる。温かくて柔らかくて湿った感触が、むちゅうつとわたくしの唇に吸い着いた。

「んんんッ！ ぐんッ！」

わたくしは唸るように声を上げ、怒りを露にする。

やめなさいと背中を叩くが、セオドアは普段の喧しさを引っ込めてむちゅうむちゅうとわたくしの唇を吸い上げるばかりだ。

柔らかくてしっとりとした感触がひつついて離れない。

（なによ、どうしてよっ）

口と口をくつつけられているのにどうして、不快感が無いのか。

こんなにも気持ち悪い男なのに口が臭いなんてことは無いし、そ

れどころかちよつと爽やかなにおいがしている。

不快感が無くて腹が立つなんて、初めての経験だ。

「ん、んっ」

ねつとりと唇を舐められ、ちゅうっ♡と優しく吸われる。

嫌なはずなのに甘く柔らかな感触にちよつと腰がゾクリとして。

ふるりと体が震えると、大きな手で頭を撫でられた。

「……っ、んーっ、んうっ！」

息が苦しくなったわたくしは、フスフスと音を立てながら必死に鼻から酸素を取り込む。

下唇を柔く挟まれて、彼の唇でゆるゆると左右に擦られた。

「——……？」

口付けが思いの外長くて。まだか終わらないのかと気になり始めるのと共に、わたくしはふとあることに気が付いた。

あの変態セオドアが、とても静かなのだ。

いつもは黙る暇が無いくらい常に騒がしいのに、ただ黙ってペロペロちゅうちゅうとわたくしの唇を味わっている。

侵入を許してなるものかと口を閉じているのに、「お口開けてくださいよお♡」とも言わないのだ。

気になり出したら、もう止まらない。わたくしはウズウズと焦れて堪らなくなつて。つい、目を開けてしまった。

(……………はっ?)

視界に映つたのは、カツと見開かれた双眸。美しい翡翠の瞳は瞳孔がガン開きになつていて、一瞬たりとも瞼で隠れない。

しかも下瞼からは、ダラダラと滂沱の涙が流れていた。

(こっつつつわ)

わたくしはそっと目を閉じた。

その間にも変態はちゅうちゅうとわたくしの唇を吸う。

その上、わたくしが噛み締めている歯の表面を勝手に舐めていた。わたくしの口にまで彼の涙が辿り着いて、ちよつとしよっぱい。

しかし不思議とこれまた、不快感がなかった。不快感が無いことが不快だというのも、初めての経験だ。

（顔が良いのが悪いのよ……！ずるいわ）

この男、紛うことなきド変態であるのだが——とにかく見た目だけは極上なのだ。その上いつも良い香りがしているし、服に汚れがあつたことなど一度もない。

中身はこんなにも気持ち悪い男なのに、見た目の良さでそれが幾分か和らいでいるのも事実なのだ。

（悔しい……！）

無理矢理唇を奪われてオエツと嘔吐きたい心地ではあるのに。

本当に、全くもって、不快感が無いのだ。物凄く不本意なことに。ヨダレを垂らしていても清潔感が損なわれないとは、どういうことなのだろうか。納得できない。腹立たしい。

「――はっ、お、おお……」

「……ふんっ」

やっと唇が解放されて。わたくしはそっぽを向いて、ツンと顎を上げた。男は呆然とわたくしを見下ろし、ほうつと感嘆の息を吐く。

「で……ちゃった♡♡♡」

「……、……。はっ？」

恥ずかしそうにテレッツと笑ってとんでもないことを申告した、顔だけはとにかく良い男。

その男の唯一の長所を、わたくしはグーで殴った。

2. 吐息 ヽ 苛立ち

カタカタと揺れる馬車の中で。わたくしは今、ムツツリとした顔で窓の外を眺めている。

あの後、更に何十分もベロベロと唇を舐められて、うっかり開いてしまった口内も余すこと舐め回された。

おかげで疲れてしまい、くったりと脱力したところで膝の上に乗せられたのだ。だから今は彼の胸板を背凭れにして座っている。

物凄く、嫌なのだけど。もう抵抗する気力もない。

「フンフン、フンフン。フスーッ♡フーッ♡」

「……………」

変態はずっと、わたくしの耳の裏のにおいを嗅いでいる。

右を嗅いだら次は左。左に満足したらまた右と際限無く繰り返す

ていた。

お腹に回った手はたまにウズウズとお腹を撫でるし、最悪だ。

「お、お、お……♡ハニースメルがチンポにくるう……♡」

「さいっつい」

しかもずっと、腰の辺りに硬いものが当たっている。

それが嫌で浅く腰かけようとしても、必ず手で引き寄せられた。

お腹を撫でる手はたまに、どさくさに紛れて下乳を掠めている。

外出の予定がなかったため、身に着けているのはコルセットの必要がないゆつたりとしたドレスだ。

そのせいで些細な刺激でも、胸に感触が伝わる。最悪だ。

「大天使マイキティをクンクンしながら、ノーハンド射精も余裕……♡♡♡」

「誰かこの変態を葬ってはくれないかしら」

そう例えば、郊外に住む危険なモンスターを選ばれし勇者が討伐する物語のように。この悲しき執着モンスターを誰か、討伐してくれないだろうか。

「ま、まままミスウィート……っ！おっ、おおおっばい、いいですか？」

「どうして許可が出ると思ったの？良いわけないじゃない」

それに問いかけておきながら、指先がソリソリと下乳を掠めている。諦めの悪いストーカーで変態な上、待ても出来ないのか。いい加減にして欲しい。顔だけは良いのに。

（いいえまあ、スタイルと収入も素晴らしいには素晴らしいのだけれど……。それらを全て帳消しにするその性格が、ねえ）

それに、出来れば顔以外を褒めたくはない。癪なので。

カリカリ。スリスリ。断ったはずなのに、彼の指がたゆんとした

乳房を下から擦っている。

しかも興奮しているのか変態はハアハアと息を荒らげ、わたくしの左耳の傍で湿った息を吐き出していた。

「むおお無理だ！触りますうツツ!!」

「きやツ!?もお……っ！あなたねえッ！」

左右からムンズツと乳房を掴まれて、直ぐ様モミモミモミツ♡と揉み込まれる。

あまりにも忍耐力が無さすぎる。

よくこんなことで国一番まで上り詰められたものだ。

不正か。もしかして不正なのか。

いやでもたまたま彼の商会の側を通りかかった時、「汚い手を使って押し上がっても意味がない！そんなことではハニーに嫌われてしまう！」と叫んでいる声を聞いたことがある。

おかしな話だ。わたくしはとつくに、嫌っているのに。

そう言えばあの時、お店が休業日だと知っていたわたくしはとっても気を抜いていた。そんな時にストーカーの声が聞こえてきたものだから、三センチほど飛び上がったように思う。

今からでもそのクレームを入れられるだろうか。

「やっつつわあっ！ ナニコレナニコレ!? アツ、すっごお♡♡♡ えっ? えっ? こんなことあっていいの?」

「……………」

耳元でうるさい。せつかくの現実逃避が台無しだ。それに何だ、その反応は。

まさかこの見た目で三十にもなって、女の胸を揉んだことがないなんてそんなはずだろうに。大袈裟すぎる。

「これは神が与え給うた大いなる世界の真髄では? これが、この世

の全てでは……？この素晴らしきおっぱいが世界の母となり海となり山となり、そして私は空に還って——」

何だか物凄い方向に発展している。どれだけわたくしのことが好きなのだと呆れて、わたくしは長々と溜め息を吐いた。

その間も変態は哲学的なことを延々と語っている。

「……ンッ」

「ほッ、おッ!?今コリッてしましたぞ!？」

どうして乳首を掠められてピクンと反応したわたくしよりも、掠めた男の方がうるさいのか。

わたくしはまた溜め息を吐いて、なんだかいちいち反抗するのも馬鹿らしくなってきた。

そうして脱力すると、彼の胸板に凭れる。

「お……♡おほ……♡ほほほお♡♡」

「気色悪い……」

体重を預けただけで、この反応だ。

セオドアはわたくしの乳房を両手で掴んでふるふると揺らしながら、不気味に笑い続ける。

「おへっ♡おひっ♡おほほほっ♡」

「その口、縫い付けてやりましょうか」

そんなことをしても、喜びそうではあるけど。わたくしに他人を痛め付ける趣味は無いため、口先だけに留めておく。

「っ、んっ」

「あっ、あっ乳首っ♡おおっ、乳首だあっ♡♡」

白いドレスの生地越しに右側の乳嘴が、キュッ♡と摘ままれた。

変態は指先を器用に使って、そこをクリクリと弄くる。

「おお、おお！これが乳首の感触……」

「っ、ん、……？」

何だかやっぱり、反応がおかしいような。

どうしようもない変態なくせに、未経験のような反応をしている。

「貴方、女性経験は？」

「え、ありませんよお！私は五年前のあの日、貴女様と運命的な出会いをするまで他人に全く、毛程も興味が無かったので!!」

「は、はあ……？」

全然運命的でも何でもなかった出会いについては置いておいて。

「でもしつかり勉強してきました！」と元気に宣う変態に、嘘を吐いている様子はない。

「貴女で初めての性的興奮を覚えて、貴女で初めて自慰をしたほどです！」

「……………」

ムフンツと胸を張る男は、とても自慢気だった。

右を摘まんでクリクリ。左を指先で弾いてピコピコ。

左右同時に乳首を責められて度々息を詰める。そうしながらも振り返ったわたくしは、目を眇めてじとりと変態を睨んだ。

「当時十七歳だったわたくしに性的興奮を覚えたの？」

「はいっ！」

「当時二十五歳だったあなたが？」

「はいっ！」

澆刺と元気良く。ブンツブンツと頷いて肯定する変態に、わたくしはクワツと目を見開いた。

「変態ッ！」

「はい、おっしゃる通りです!!!」

大声で叫んだはずが、もっと大きな声が返ってきて。キーンと鳴

った左耳に眉を顰めていると、またキュッ♡と乳首を摘ままれた。
しかも今度は、左右同時にだ。

「あっ、やだ……っ」

「か、か、可愛い……！ やなの？ やなのお？？ がんわいいん♡♡」
クニクニ♡クリクリ♡にゆくにゆく♡

服越しに摘ままれた乳首が、指の腹で擦られている。

隔たり越しの刺激は、初心者であるわたくしには丁度良くて。過剰に反応してしまいそうになるのを、わたくしは必死に堪えていた。

「だめ、これ、だめなのっ♡♡」

「えっへへえ♡かわいいいっ♡♡」

それでも刺激に耐え兼ねて、わたくしはふるふるとかぶりを振る。
そんな拒絶に構わず、変態は乳首を左右同時に捏ね続け、揺れるわたくしの頭に口付けを落とした。

「ん〜しゅきっ♡しゅきっ♡だいしゅきいっ♡♡」

「ン、あ、んっ、ん…ッ！」

しつこく乳嘴を捏ねられて、ピクピクと体が跳ねる。

自分で触れてみた時は、こんな風に気持ちよくはならなかった。

初めての感覚にわたくしは動揺して、ムズムズする足の中心を隠すように膝同士をくつつけた。

「あっ、おっ♡ハッ、足、もじもじしちゃってえ♡♡も、も、もしかしてっ♡」

「んっ、あっ♡ふう、んんっ♡」

優しい力でマッサージされる乳嘴が、得も言えぬ快感を生んでいく。不意打ちで突起を弾かれれば、大きな声が出そうになって慌てて喉を閉めた。

「あへっ♡えへっ♡や、やっぱりそうかな？へへッ♡」

「……んっ、ンツ♡ふ、んんっ♡」

体の奥に、ドロツとした熱が蓄積していく。わたくしはたまらずキュツと下唇を噛んで、スカートの生地を握り締めた。

「ま、マイルスウィートツ♡お、おまんこ、むずむず♡してます、か……?」

「え?——なっ!」

最初は何を聞かれたのか、分からなかった。

けれどじつくりと脳内で言葉を繰り返していく内に、理解した。

「そんなわけ、ないでしょう!」

あまりにも非常識な質問だと、わたくしはいきり立つ。

反射的に擦り合わせていた膝を離したが、結局どうすることも出来なくて。あわあわと視線を動かした後に、再び足を閉じた。

「……アレツ!? マイルスウィート、おまんこで伝わるのですか!」

「あえっ!? あ、いや、わ、分からないわ! 何の、ことお……っ!?」
慌てて否定した言葉の最後で、むにゅうっ♡と左右の乳首を押し潰された。

ビリリツと腰に走った電流。わたくしは上体を前に倒し、「んゝゝ」と声を上げながら強く目を閉じた。

「あは、は、ははっ! マイスウィートは、エッチなんだ! エッチな子なんだ……っ!!」

「やめっ、あ、ふ、んゝ……!」

今度はスリスリスリツ♡と親指で突起を擦られて。わたくしはぴったりと背中に胸板を密着させられたまま、より体を折り畳んだ。それでも乳首はしつこく刺激され、ビクビクと体が跳ねる。

「ん、ちゅっ♡ 貴女がエッチな子で、私は嬉しいです♡ 帰ったらいっぱいまぐわいましょうね♡♡」

「やら、しないっ！ち、違うもんっ！」

後ろ髪を指で避けられて、項に口付けられる。再び前に回った指でしつこく乳首を弄られて、お腹の奥がキュンキュンと引き攣れた。摘まんで擦ったり引っ張ったり、指の腹で押し潰したり。かと思えば押し潰したままコスコスと擦られて、わたくしは気持ち良くて堪らなくなる。

「お友達から恋愛小説を借りて、読んでただけだもん……！」
だからエッチじゃないとわたくしは必死に弁明をするが、後ろの男は嬉しそうにアハッ♡と笑った。項をねっとり舐め上げられてから吸われ、吸われた場所がチリツと痛む。

「でもその本に『おまんこ』って単語が出てくるんでしょっつ？
じゅーぶんエッチじゃないですかぁ♡」

「ち、ちが……っ！あんん♡」

服の上から右の乳首に爪が立てられて、カリツと搔かれた。

これまでと違った刺激。カリカリと続けられている内に、何も考えられなくなっていく。続いて左側もカリカリされ始めると、わたくしは完全に頭が働かなくなった。

「どんな話を読んでいたのですか？ おっきいおチンポで、おまんこズンズン突かれる話??」

「あ、ん、ふうっ♡お、王子様が……っ」

「お、ほっ♡いきなり女の子らしい単語きた♡かわいい♡♡」

わたくしはクリクリカリカリと服の上から乳首を刺激されながら、つい最近読了した小説の内容を思い出す。たまにピンツ♡ピンツ♡と弾かれるがアクセントになって、堪らない。

「ぼ、没落した貴族の令嬢を、迎えにいつ、てえっ♡♡」

「ほほほお♡」

物語のラストシーンを思い出したわたしはぼんやりと悦に浸り――それから最大の濡れ場シーンを思い出して、今体に受けている快感と記憶をリンクさせてしまった。

「あっ♡あんっ♡あっ、あっ♡」

にゅぐっ♡と摘まんで柔く潰された左の乳首を引っ張られ、反対の乳首をピンピンピンッ♡と素早く弾かれる。頭の中がすっからかンになっていくけれど、口からは勝手に言葉が零れていった。

「幸せなえ、エッチと、結婚をする、はなしっ」

「あら〜♡♡♡それは素晴らしい純愛と、素晴らしい純愛エッチのお話なんでしょうねえ♡♡」

「……っ♡」

コクンと頷いたところで、また左右同時にきゅうつと乳首を摘み上げられる。今度はシコシコ♡と扱くように刺激されて、ビクツと

内腿が痙攣した。

（二十二歳にもなって、夢見がちよね）

僅かに晴れた思考で、わたくしは考える。

たった一人の友人にしか明かしていなかった趣味だ。それに明るみになることを恐れて、自分で本を買うこともしなかった。

秘密を明かしてから『いっそのこと幻滅してくれないかしら』と願うが——残念ながら変態は尚も、可愛い可愛いとわたくしを褒め称えながら、項に口付けている。

「でもお、純愛のお話なのに『おまんこ』って単語が出てくるんですかあ??」

「えっ、あっ」

話は終わったとばかり思ってたのに、掘り返されてしまった。痛いところを突かれたわたくしは動揺を露にする。

「それにい、物語のヒロインは没落貴族の令嬢……？ふふふ、マイ
スウィートはヒロインに成りきって物語を楽しんでいたのですね♡」
「つつ……！ち、ちがつ」

否定しようとしたところで、かぷりと項に噛みつかれた。ひっと
悲鳴を上げたところでスリスリと乳首を擦られ、腰が甘く痺れる。

「ヒロインが素敵な王子様におまんこをズンズンされるところを読
みながら、自分がおまんこをズンズン突かれている想像をしていた
のでしょう？やっぱりエッチな子じゃないですか♡♡」

「あ、んツ！ふぁ、ちがつ、んんう……！」

辱しめるようなこと言われて、嫌な気分になっているはずなのに。
わたくしの体はビクビクと細かく痙攣し、お腹の奥を重たく、そ
して熱くさせていく。

乳首だって絶えずスリスリされていて気持ちが良い。

「私は貴女様限定で無尽蔵に興奮できますのでっ♡毎日だって、エッチなことをしましょうねえ♡♡」

「や、あうっ♡あんん……っ！」

イヤイヤとかぶりを振って。そんなことはしたくない、されたくないと思っているのに。

乳首の刺激と興奮と期待が混ざり合って、頭がクラクラとする。

「私が物語の王子様のように、貴女のおまんこをペロペロしゃぶって♡トロトロになったところにぶっといチンポを挿入してズンズンどちゅどちゅ突いて差し上げますっ♡♡」

「あ、ふあっ！……っ、ん、んっ♡♡♡♡」

靴の中で足の指をキュツと丸めて。わたくしは熱い体に密着され体を折り畳んだまま、息を詰めた。

ギユウツと蜜道が収縮し、心臓がドクドクと暴れる。

両方同時に乳首をつねられると脳天にまで鋭い快感が突き抜けて――わたくしは大嫌いな男の膝の上で、達してしまった。

「……っ、ハッ、あッ♡はあっ♡」

「ああ――……」

頭の後から、うっとり息を吐く音が聞こえる。

そしてそれに続いて、うっそりとわたくしの名前を呼ぶ声が聞こえた。許可をしていないのに、呼び捨てだ。

後頭部に口付けられ、労るように優しく乳嘴が撫でられる。

「愛しています。心から、貴女を愛してる……」

「……あ」

達した直後に注がれる、重苦しいほどの愛情。

限界まで上り詰めた後の体はその想いにトクンと胸をときめかせ、甘い疼きを生じさせた。

「魂で貴女に惹かれている。貴女の全てが愛おしい。貴女の、全てが、ほしい……ッ！」

「……………」

段々とヒートアップしていく変態の感情に反比例して、わたくしの気持ちは次第に凪いでいく。ずっとあの調子で真剣に口説いてくれたら、見た目の良さもあって簡単に落ちてしまいそうなのに。

つくづく残念な男だと呆れて、わたくしは瞼を半分下ろした。

「だから——早く、繋がりたいっ♡♡♡ 貴女と!! 奥までッ!! ズッ
ッップリ、と……っ!!」

「……はあ」

うっかりちよつと絆されそうになっていたわたくしは寧ろホツとして。こういうところが駄目なのよねえと、近い将来夫となる人を、横目で見やった。

3. 思考 ヽドン引き

その後の馬車の中は、非常に喧しいことになった。

下も！ダメ！下もお！ダメ！と、押し問答をする羽目になったからだ。

結局わたくしが「馬車の中でこれ以上するなら許しません」と全力で拒絶して。それに変態が渋々折れた形になったのだが、ずっと密着されているしやたらとキスをされて体温が上がるしで無駄に汗を掻いた。

それなのに屋敷に着くなり、横抱きで運ばれる。

「さあこちらをご覧くださいませっ！去年完成した、姫を迎え入れるための新居です！わーっ！」

「……はあ……」

変態が一人で勝手に紹介して、一人で勝手に盛り上げている。

目前に聳え立つのは貴族顔負けの大豪邸。

王都の高級住宅街という一等地にも関わらず広々とした敷地と庭。それから大きな噴水。そして馬車の正面にズラツと整列して頭を垂れるのは、沢山の使用人達だ。

「はあ……」

求婚を断られまくっていたのに、この豪邸を建てたのか。それにこれだけの人数を用意するのにも、かなり時間がかかることだろう。父が負債を抱えるずっと前から準備をしていたはずだ。

ゾツとするほどの執着心が窺えて、わたくしは痛むこめかみを押しさえた。

「ふひひっ♡おほほっ♡♡いひひひひっ」

「気持ち悪い……」

使用人が挟んだ道を颯爽と歩き、両開きの玄関ドアに向けて白い石畳を歩いていく変態。胸を張ってわたくしを横抱きに行っているのに、体幹がまるでブレない。

そう言えば以前、わたくしに好かれるために体作りを頑張っていたと言っていたか。興味が無かったので今の今まですっかり忘れてしまっていた。我ながら薄情だ。

「んふふんふんふん♡んふふん♡」

（幸せそうねえ……）

そのお綺麗な顔は歓喜で満ちていて、蕩け切っていた。自分の城にわたくしを連れ込むのが、嬉しくて嬉しくて堪らないのだろう。

（こうなっては仕方ないわ。腹を、括りましょう）

人ひとりを抱き上げていても淀み無く進む足が、三段の階段を上がり切る。そしてドアの前で待機していた二人の執事が、仰々しく

ドアを開けた。

「お待ちしておりました。お帰りなさいませ旦那様、奥様」

「旦那様！奥様!!」

「本当にうるさいわね」

今の聞いた!?とばかりにこちらを見て、唾を飛ばす『旦那様』。
耳が痛いのでジトリと瞼を下ろして睨み付けるが、変態はデレツ
と相好を崩した。

目が合ったため、口の端からトロツと唾液が垂れる。うわ。

「お初にお目にかかります。私、家令のジェームスと申します」
胸に右手を当てて腰を折る壮年の男性は撫で付けたグレイージュの
髪が素敵だ、紳士だった。

一時間ぶりにまともな人間と関わったわたくしは、やけに感心し
てしまう。

「旦那様とはご実家の頃からのお付き合いで——幾分か、発言権もございます。お困りの際は是非、私めにご相談ください」

「まあっ！ありがとうございます、ジェームス。是非そうさせていただくわ」

「ま、マイスウィート……ッ！私以外の男の名前を呼ばないでくださいー!!」

傍のうるさい男は放っておいて。わたくしは想像していたよりもマシになりそうな新生活に、ホッと安堵の息を吐いた。

とりあえず一人は、この屋敷に味方が居そうだ。それだけで少しは前向きになれる。

「旦那様、湯浴みの準備が出来ております」

「あ、うん。ではマイスウィート♡寝室にお運びしますね♡」

「えっ？わたくしも湯浴みをするのではないの？」

この問いかけは、これからすることへ前向きであると捉えられる

可能性があつたが――

わたくしが何と言おうと、この変態は初夜を遂行するだろう。それに疲れてしまったわたくしにはもう、抵抗する氣力がなかった。馬車の中で変態と二人きりになったせいで、大分精神が磨耗している。

「いえいえ、湯浴みをするのは私だけですよ！ 貴女様はそんなことはしなくてもいいのです。だって湯浴みをしてしまったら、せつかくの香りが薄れてしまうではありませんか……！ あと、味も♡」
「……………はぁ」

一体一日で何度、溜め息を吐けばいいのだろう。

わたくしはガツクリと肩を落として、遠くに視線を向けた。

視界の端ではジェームスが、苦り切った顔で額を押さえている。

「ジェームス、わたくしも湯浴みをするわ」

家令に顔を向けて視線を合わせ、自分の意思を伝える。

ジェームスは腰を折って、畏まりましたと答えた。

「な、何故ジェームスに声をかけるのですか!? 私に申し付けてください！ マイスウィートおっ！」

上からギャンギャンとうるさい。

でもわたくしは変態を無視して、尚もジェームスを見つめ続けた。
ジェームスは心得ています、と静かに頷く。

「それに湯浴みなんてしなくても……！」

「湯浴みをさせてくれないなら、絶対に触れさせないわ」

ツンと顎を上げて強い語気で伝えれば、上からこちらを見下ろしている変態がカパッと口を開け放った。

チラリと表情を窺えば、ズガンという擬音がピッタリな顔をしている。まるで脳天から稲妻に貫かれたかのようだ。

「なん、ですと……？ふれ、られない……？」

よっぽどショックだったのか、わたくしの体を抱える腕はフルフルと震え、翠の双眸が涙で濡れる。

悲しむ顔を見たことがなかったわたくしは、僅かに狼狽した。けれど己の主張を通すために、必死に表情を取り繕う。

「湯浴み、してもいいわよね？」

「………、……はい」

物凄く渋々ではあったけれど、どうにか言質が取れた。

ついでに「下ろして」と言ってみるが、それに関しては「嫌です！」とキツパリ断られる。

結局わたくしは浴室の前まで横抱きで運ばれて——根性の別れのように涙ぐむセオドアに呆れて溜め息を吐いた。

彼をシッシと手で追い払い、侍女に囲まれて脱衣所へと入る。

彼は彼で別の浴室を使うとのことだから、後で合流することになるだろう。

* * *

脱衣所に入ると、わたくしの専属として雇われた三名の侍女が待っていた。彼女達と挨拶を交わしてからわたくしはドレスを脱がせてもらい、浴室にて全身をピカピカに磨いてもらう。

彼も使うことがあると言う夫婦用の大浴場は大理石製の床と壁の広い空間で、デザインは洗練された素晴らしいものであった。

大人が何人でも同時に浸かれそうな落とし込み浴槽には薔薇の花弁が浮いており、お湯はほんのりと桃色がかった白乳色。

壁の上部に嵌め込まれている横長の磨りガラスからは、外に生え

ている木が木の葉を揺らしている情景がぼんやりと見えていた。

洗髪剤や体用の石鹸も全て一級品で、とてもとてもわたくし好みであつた。

（これは……、たまらないわね……）

侍女の手で全身をピカピカに磨かれたわたくしは今、広々とした浴槽に肩まで浸かっている。

その上でゆったりと、頭皮マッサージを受けていた。

お湯の温度は少し高め。完全に、わたくし好みだ。

一体どこで調べたのか。知り尽くされていて、怖いほどである。

（しあわせえ……）

アリサと名乗った二十四歳の侍女は、神の手を持っている。

タオルで拭った髪に香油を塗り込めてマッサージをしてくれているのだが、それがとてつもなく気持ちがいいのだ。

心地よいお湯の温度と相まって、心と体が見事に蕩けていく。
例えここが変態の居城であって、これからその変態の元に嫁ぐことになっていても。

こんな素晴らしい経験が出来るのならまあいいかと容認してしま
いそうだ。

「あ……」

ぐう、とお腹が鳴ってしまった。夕飯にはまだ時間が早いが、緊張が解けたせいで唐突に空腹を感じ始める。

「湯浴みが済まれましたら軽食を摂られますか？ 旦那様は凄腕のシェフを数人、雇用しておりますよ」

「凄腕の、シェフ……」

あの変態はきつと、わたくしの食の好みだって把握しているはず
だろう。だとしたら、とても美味しい食事に取りつけるはずだ。

「——サンドウィッチが食べたいわ。ハムとオリーブが入った……」
「畏まりました。ニーナ、シェフに伝言をお願いね」

はい、と答えた十八歳の侍女、ニーナ。

彼女はニコツと可愛らしくわたくしに笑いかけると、静かに浴室を後にした。

侍女は三人共温厚で優しそうな、可愛い女の子達だ。

わたくしのお友達選びの傾向と完全に一致している。

自分自身は気が強い方なのに、わたくしはおっとりとした同性のお友達が大好きなのだ。

みんな、お屋敷に会いにいくとニコニコ笑って喜んでくれる。そんな友人達と同じ雰囲気侍女達に感じ、わたくしはお湯の中でふにやふにやとりラックスしていた。

「奥様奥様。わたし前に味見をさせてもらったことがあるんですけど

ど、もうおいしくって！頬っぺたが落ちるかと思いました！」

「こらユーリ、失礼でしょう」

もう一人の侍女、二十歳のユーリが恍惚とした表情で空中を見つめて、ぽやんとしている。

アリサはそんな彼女を嗜めるが、わたくしはそんな可愛らしい様子に笑いながら、いいのと口を挟んだ。

「今ニーナは居ないけれど……三人共、仲良くしてちょうだいね」

はい、と二人の声が重なって。穏やかに笑う侍女二人にわたくしはまたふにやりと蕩けた。

しかしまたぐう、とお腹が鳴って——アリサから「そろそろ上がりましょうか」と声をかけられたわたくしは、そうねと頷いてお湯から上がった。

ふかふかのタオルで全身を拭かれたわたくしは、スケスケの下着を上下に着せられた。その上から上質なシルクのネグリジェが被せられ、ガウンを羽織らせてもらう。

わたくしの好みとは違う夜着は、きつとあの変態の趣味なのだろう。真っ白で上質な生地は神秘的で清楚な印象を抱かせるのに、スケスケなのが妙にいやらしい。

外側は良いのに、内側はとんでもないドスケベ——まるであの男のようだ。

そんな服装を不服に思いながら、わたくしは脱衣所を後にする。けれど一步外に出た瞬間、わたくしは「あら？」と声を上げた。なんと大浴場のドアの前に、いなくなっただけのド変態がいたからだ。

「ああっ、マイハニー！ほこほこしてて可愛い!! 頬がほんのりと赤い！かわいいいいいっ!!」

「……………」

うるさい。せつかく心も体もほぐれて多幸福感に包まれていたのに、水を差さないでほしい。

わたくしがジトリと半目で睨んでも、変態は自分の体を抱き締め、クネクネと動き続ける。気持ち悪い。

「あなた、湯浴みしに行ったのではなかったの？」

「ああ、そうなのです！別の浴室を使おうと思ったのですが、妙案が浮かんで……………！」

はあ、と相槌を打ったわたくしは、チリツとした頭痛に襲われた。何だか嫌な予感がする。この男が言う『妙案』なんて、絶対ろくでもない。

「あ、私は先に軽食を摂りましたので、私のことはお待ちいただく
なくて大丈夫ですよっ♡」

「はあ……」

突然話が逸れて、わたくしはひよいと右の眉を上げた。

確かにそう断ってくれていなければ、一緒に食べるべきかと迷っていたことだろう。

気遣いは有り難いが、今聞きたいのはそれじゃない。

「好きなだけお食べくださいね！」

「ええ、ありがとう。いえ、そうじゃなくて。妙案って？」

セオドアはウキウキとしているものの、いつもの暴走具合が鳴りを潜めていた。それが寧ろ不気味で、わたくしは頬を引き攣らせながら優しく問いかける。

お礼を言ってもらえた！と喜んで瞳を輝かせている変態を流して、

早く教えなさいと右手を差し出す。

「あ、はい！ マイスウィートが浸かった湯を、心行くまで堪能しようかと……っ！」

「……は？」

言うなり熱に浮かされたような目でこちらを見つめる変態。

見た目だけとはにかく良いのに、色々と残念な美丈夫。

——メラリと胃の奥から熱いものが込み上げる。それは、紛れもない怒りだ。

「……イヤツ変態！ いちいち発想がいやらしいっ！」

「ふへ……っ♡」

わたくしはヒシツと自分の体を抱き締めて、残してきたまだ温かい湯を思い出す。

全身裸の状態でたつぷりと浸かった、桃色がかった白乳色の湯。

汗が溶け込んだはずのそこを、どう堪能するというのはか――

「へへ、へへ……っ♡」

「ひい……！」

だらしない口の端からトロ、とヨダレが垂れている。わたくしを見つめる瞳は今や瞳孔が開き、ギラギラと鈍く光っていた。

こちらに伸びてくる両手が、ワキワキと妙な動きをしている。

「お、おかしなことにお湯を使ったら許さないわ……っ！」

「おかしなことお……？へへ、おかしなことって、何でしょうか♡」
ゆっくりゆっくり、変態が迫ってくる。

後ろに居る二人の侍女が、引いている気配がしていた。

けれど変態は止まらない。

彼にとって、この場に居る他の人間はわたくし一人なのだろう。

侍女の姿は視界にすら入っていない様子だ。その証拠に彼の視線

は、一度たりともわたくしから離れていない。

「そ、そうだ！変なことをしたら後でジェームスに報告させることにするわっ！」

「えッ!? な、えっ!?」

彼の右手がわたくしの左腕に触れる瞬間。

今度はわたくしに妙案が浮かび、それを彼に突き立てた。

するとセオドアはガンツと衝撃を受けたような顔をして、ピタリと体の動きを止める。

どうやらジェームスに叱られることは、セオドアにとってかなり嫌なことであるらしい。見事に青褪めていた。

「もし変なことをしていたら、彼にたっぷりお説教してもらいますからねっ」

「そ、そんな……ッ!? マイスウィートが浸かった湯でシコシコして

ピュッピュするっていう私の夢は……!？」

後ろでユーリがうわあと引いた声を上げている。

わたくしももちろん引いたが、すかさず次の攻撃を放った。

「そんなことをしたら、わたくしにもジェームスにも筒抜けよ！それにおかしなことをしたと報告を受けたら、今日の初夜はナシにするわ……っ！」

「え、あっ、しよんにやあ……！」

男は膝から崩れ落ち、悲壮感たつぷりに涙を流した。

多少良心をチクチクされながらもわたくしは腕を組み、フンツと顔を背ける。言い逃げも効果的だろうと判断したわたくしは、そのままスタスタと歩いてセオドアの横を通り過ぎていく。

「あああゝっ！酷いですうマイスウィートお……！」

「ふんっ変態！」

おおーんと声を上げて泣く変態を置いて。わたくしは夫婦の寝室へと案内してもらい、用意されていた美味しいサンドウィッチをお腹がパンパンになるまで食したのだった。

* * *

流石に食べ過ぎたかしらと後悔しつつあったお腹がこなれた頃になって。セオドアと言う名の変態が、バスローブ姿で現れた。

この夫婦の寝室には対角線上に二つのドアがあり、各自夫ないし妻の私室に繋がっている。

アリサはわたくしの部屋に繋がるドアのみ鍵があると教えてくれて、変態に会いたくない時は鍵を閉めるようにと助言をしてくれた。きつとこれから、沢山活用することになるだろう。

「ンまッ、まい、スウィート……♡」

「……………」

とびつきり美味しいサンドウィッチを食べてお腹が膨れ、機嫌が直ったわたくしは今、長椅子に腰掛けて足を組んでいる。

そんなわたくしの前には、床で膝を折った変態。

恍惚とわたくしの顔を見上げ、テレテレと頬を赤く染めている。

「おほほほっ♡かわいい……♡うちゆくしい……♡」

「……はあ」

『美しい』という言葉は、この変態の方が良く似合う。

金に近い薄茶色の長髪は丁寧に香油を塗り込めたのか艶々のサラサラで。女が嫉妬するほどの煌めきを放っていた。

顔の造形だって、つい見惚れてしまうほどに美しい。

——まあ今は、わたくしを見つめてだらしないことになっている

が。相変わらず口許が緩くなって、ヨダレが垂れている。

「しゅ、しゅき、れす♡」

「はいはい、知っているわ」

嫌というほどね、と心の中で付け足す。

本当に、わたくしの何がこの男の琴線に触れたのだろう。

こんなにも美しい男を虜にして狂わすほどの何かが、わたくしにあるとは思えない。

「あの、あの、ベッド、いきましょお??」

ふう、とわたくしは息を吐いた。

いつもの勢いはどうしたのだとツツコミを入れたい。

この寝室に来るなり、この男は途端に大人しくなってしまった。ずっとモジモジテレテレしている。

「……もう、仕方がないわねえ」

「えへへ……♡かわいい……♡」

グイグイ来られたらこっちも強気で突っぱねられる。

けれどもこうも大人しいと、調子が狂ってしまうではないか。

わたくしは額を押さえてかぶりを振ると、静かに立ち上がった。

それから男に対して、右手を差し出す。

「ベッド、行くのでしょうか？ わたくしの気が変わる前に、連れていった方が良くいではなくて？」

「あ……うへへ……♡」

セオドアはほわっと頬を赤く染めると、わたくしの手を取った。

その手は燃えるように熱く、それでいてわたくしの手をすっぽりと包み込めるほどに大きい。

彼はちよつとフラつきながらも立ち上がり、それからそつとわたくしの体を抱き締めた。

「私の、愛しの君――」

「……っっ」

低く、しっとりとした声で囁かれる愛の言葉。

本当に調子が狂う。正直なところ、見た目は物凄く好みなのだ。最初からこんな態度で接してくれたならきつと、わたくしはすぐに落ちていた。

ああ、変態じゃなければ――と、わたくしは心の中でひとり言つ。

「さ、ベッドに……♡ささっ♡」

「もう、いきなり積極的になるんだから」

繋いだ手を引かれ、寝台へと誘われる。

何だかな、と思いながらも満更ではないのも事実で。

あっさりと絆されつつあるわたくしは複雑な心境を抱えて、寝台までエスコートされていった。

「で、で、ではガウンを……」

お腹のところで結んでいた紐をほどかれて、シュルリと音が鳴る。震える手で開かれるガウン。

その中から現れた破廉恥な夜着を見た男は――

「おおっ、ほお♡♡♡エツツチチチ♡♡♡」

「あーあ、いつもの変態に戻ってしまったわ」

さっきまでのしっとりモードを吹き飛ばして、変態が大感激している。ブルブルと全身を震わせ、はふはふと息を荒らげている。

（まあ、でも。仕方ないわよね、変態なんだもの）

目の前で男が両手をワキワキさせながらはあふうと息を上げている。そんな姿を前にして、わたくしは静かに苦笑した。

それから彼が硬直しているのを良いことに、寝室の中を見渡す。同じブランドで揃えられた調度品は、どれもこれも白色や桃色、

黄色など淡い色合いばかりで、わたくしの好みのドストライクだ。

ゾツとするほどの執念深さを感じられるが——不思議と、嫌な心地はしなかった。

棚の上に飾られている小物までもが、吟味に吟味を重ねて選ばれたものなのだろう。精巧なボトルシップから可愛らしい兎のぬいぐみ、それから陶器の猫の置物など、様々な逸品が並んでいる。

中には外国産の非常に珍しい宝石が嵌め込まれた装飾品もあった。小物の統一性の観点から言えばバラバラだが、個人の好きなものを集めたらこうなるだろうと分かる。

それこそ『愛』が無ければ出来ないことだ。

「あ、あ、あの、触れ、ても……？」

「……いいわ、好きにして」

わたくしは遂に観念して、ガウンの前を開くと寝台に腰掛けた。

黄色いカーテンと薄桃色の天蓋。

ここで眠ると、きつとお姫様気分を味わえるだろう。

（……あ、そう言えば……前に読んだ小説に、こんな天蓋付きベッドが出てきたような……）

挿し絵にあった素敵なお寝台。

なんて素敵なのと夢見て、うつとりとした記憶がある。

それなら恋愛小説の趣味も、バレバレだったと言うことで——馬車の中で聞き出されたのは、ただの事実確認とプレイでしかなかったということか。

「し、ししし失礼いたしますっ！」
「ええ」

何枚も上手ね。これじゃあ敵うわけなんてないわ、と心の中で言ちて。わたくしはゆるりと目を細めると、床の上で膝立ちになって

いる男を見下ろした。

震える手が恐る恐るこちらに伸びてくる。

おかしな話だ。馬車の中で沢山触れて、キスまでしたのに。今更緊張するだなんて。

「おっほお♡♡やわらかっ♡」

「……馬車の中で、触れたでしょう？」

右手で左の乳房をふにと掴んで、初めてののように感動している。わたくしはどうしようもない男を見下ろして、微かに笑った。

「あっ、あっ、わら……っ」

「うん？」

どうせ笑った顔が可愛いとか言うんでしょ、と思ったわたくしは仕方ないわねえと更に笑みを深めた。それから空中で震えている彼の左手を掴むと、その手を右の乳房に押し当てる。

「あ、え、しゅき……!!」

「はいはい、知ってますわよ」

ムーツと下から唇を寄せられたので、仕方なく上半身を前に倒してこちらからも唇を寄せてやる。

ふにゆりと潰れた二人の唇。大きな体がビクツと跳ねて、それからカチンと硬直した。

「おふっ♡♡♡」

「……ん？」

触れ合わせた唇が熱い息を吐き出したと思えば、彼の体が大きく縦に跳ねる。わたくしは首を傾げつつも顔を離して、フルフルと震えているセオドアの姿を見下ろした。

「で、でちゃった……♡」

「……はあ」

馬車の中でも聞いた言葉だ。

わたくしはガツクリと肩を落として——それからその肩を、左右からガシツ！と掴まれた。

「マイツ、スウィーートツ!!」

「きゃあああッ!？」

強く肩を押されて、世界が傾く。後ろに倒れていったわたくしはボスンと布団の上に倒れ込み、呆然と天蓋の天井を見つめた。

「はあ、はあ、はあ……!」

「あ、きゃ、こらっ」

普通は一度出したら、落ち着くものではないのか。

何もかも予想外で喜天烈な男に押し倒されたわたくしは、焦って蹴きながらもハラハラと落ちてくる長い髪に顔を囲われていった。

外の世界と隔絶されて、目前に迫る美しいかんばせのみが視界に

映る。

ハラハラと滑り落ちる髪があまりにも美しくて。その光景につい、わたくしは見惚れてしまった。

「愛、してる……！」

「……ん、むうっ!？」

隙有りとばかりにむちゅっ♡と口に食らいつかれて。緊張していたのが嘘のように、むんずつと豪快に左右の胸を掴まれる。

（だから、この温度差は何なの……!？）

ねっとり唇を舐め回され、はみつと下唇を噛まれる。

その間も乳房は両方ともふるふると揺らされていて、中途半端に開いた足は彼の膝で割られた。

積極的になった上に手際も良い。そんな男に対してわたくしは目を回し、されるがままだった。

一応は抵抗をしているのだが、まるで意味を成していない。何なら抵抗というよりはただモゾモゾと身動いだけだ。

「はあっ、はふっ♡んぢゅ、んっ♡」

クリツ♡くにっ、カリカリ……♡

「あ、んんゝ……っ！ん、ふうっ♡」

薄いネグリジェとレースの下着越しに、右の乳首が摘ままれている。指の腹でコリコリと捏ねられて、ビリビリとした感覚が背筋を通った。

その刺激に気を取られていると、膝でグイッと右足を押され、彼の腰が足の間に割り込んだ。

「はあっ、ああ、好きだ……！」

「あ、ふああ……っ♡♡」

切なく名前を呼ばれながら、のしかかられている。

男性から強く求められる感覚に胸やあらぬところがキュンとして、わたくしは頬に口付けられながらそっと目を閉じた。

グイグイと迫られる度、宙に浮いた足がブラブラと揺れていた。

「はっ、はっ、……んむっ♡」

ぢゅるっ♡ちゅぱッ♡コリコリコリッ♡

「ん、ふっ♡んんうっ♡ン、あ、ふっ♡」

唇を吸われ、裏側にねろねろと舌を這わされる。

そんな最中でもわたくしは、胸の先を弄くられていた。

左右同時に捏ねられる乳首が、気持ちいい。

「あっ、ンッ！」

「あむっ♡んちゅるっ♡はふっ♡」

「ん、ンッ、んうっ♡」

喘ぐために開いた唇の狭間から熱い舌が侵入し、舌裏でわたくし

の唇裏を撫でる。

乳首は右だけピンピンと弾かれています、左はキュムツ♡と摘ままれては力を弱められてを繰り返されていた。

「あ、つるつる……♡」

「っ、んっ♡ふ、う……っ♡」

ぺとりと歯の表面に触れた舌尖。

そのままぬろぬろと前歯を撫でて、歯茎にまで舌を這わしていく。

「ちっちやい歯……♡かわいい……♡」

「っん♡ふう、あんっ♡」

歯まで褒められるとは思っていなかった。

何とも言えない心地でわたくしはコリコリと乳首を責められて、はふっと口から熱い息を吐く。

「吐息、おいしっ♡あまい♡しゅきっ♡」

「は、はっ、んうっ♡」

口から洩れ出る息を大きな口で受け止められて。

薄く開いた唇やその周囲を、円を描くように舐められる。

乳首は両方とも親指で押し潰してスリスリ。滑らかな布地越しに擦れる感覚は、何とも言えない絶妙な快感だった。

「えへっ♡たべちゃおっ♡」

「ん、んっ♡」

またもや口に食らい付かれて、今度は口内にまで舌を挿し込まれる。わたくしものより長い舌が、すぐにわたくしの舌を見つけて。ねっとりと絡み付いては、ビクビクとしきりに跳ねていた。

「おっっ♡ふう♡♡…おっ♡」

「んむっ、んんっ！んくっ♡」

わたくしの舌に絡み付いては執拗に舐め上げ、表面をズリズリと

擦り付けてくる熱い舌。

それはわたくしの舌の裏側に溜まった唾液を掬ってもビクリと跳ねて、まるで感動するかのように動きを止めていた。

「あまい……っ♡おい、ひいっ♡♡」

「んッ、うっ♡あ、ふう……っ♡♡」

間近にある高い鼻が、フンフンと荒い息を繰り返している。

彼の手はわたくしの乳首をしつこく捏ね続けており、長い舌は口内をぐっちゃぐっちゃと掻き混ぜていた。

呼吸を奪う熱烈な口付けと、押し付けられる熱い体。

「フーッ♡フーッ♡」

「……っ！」

——怖いもの見たさ、だろうか。

嫌な予感がしつつもうっすらと瞼を押し上げると、瞳孔がガン開

いた翡翠と目が合った。

わたくしは左の内頬をグチグチと擦られながら、慌てて目を閉じる。腰が押し付けられているせいで、足のあわいが硬いものでゴリゴリと擦られていた。

「はふっ♡お、ほほ……っ♡お口が美味しすぎてえ、止まりませんんっ♡♡♡」

「ハッ、はあっ、はあっ」

にゅぷぷっと口から舌を抜き取って。何事かを呟いた後、変態はわたくしの頬を外側から、舐め始めた。

「おいひいっ♡おいひいっ♡どこもかしこも、あまくてえ♡♡」
「んん、やだ、どこを舐めて……」

乳房を鷺掴みにされて揉み込まれながら、わたくしは眉を顰めた。頬を舐めていたはずの舌は鼻の下に移動して、にゆるにゆるとそ

こを擦っている。

むずむず。鼻がこそばゆくて、落ち着かない。

「……くしゅっ」

「お、おお……♡んふふっ」

あ、と気付いた時にはもう遅くて。くしゃみをした拍子でちよろつと出てしまった鼻水が、綺麗に舐め取られてしまった。

「くくっ、もう、変態っ！」

「へへ……♡御馳走様でしたあ♡♡」

とろりと幸せそうに笑った変態がわたくしの体を抱き締めて、ちゅ、ちゅ、と顔中にキスの雨を降らせてくる。

体重をかけられているはずなのに、大して重くはない。

そんな気遣いにちよつとだけキュンとしたわたくしだったが——
ときめきは気のせいだと思うことにした。

「すきすきすきすきすきっ♡♡」

「ん、ふっ、はあっ」

顔中をベロベロに舐め回されて、至るところに口付けられる。

わたくしはキスの猛攻に耐えながら、空いている口で上がった息を整えていった。

押し倒されていたはずが抱き締められたままグルンと体が回転して。仰向けになった変態に乗っかる体勢になったわたくしは、ぎゅうぎゅうに抱き締められながら足でも体を締め付けられる。

これまでとは違った息苦しさ、わたくしはそっと眉を顰めた。

「らいしゅきっ♡がんわいいっ！んーまっ♡んゝゝっむ！」

「ん、ン、……もうっ！んんっ♡」

ぢゅっぱぢゅっぱとしつこく唇を吸われて、口の周りが唾液でベトベトになる。しかし顔中既に、彼の唾液まみれだ。

またグルンと体が回転して背中が布団に埋まる。

本当に忙しない——と呆れていれば、またしても唇を奪われた。

「ぐん、ぐんーッ！」

ぢゆるぢゆるくちゆくちゆ。舌に舌を絡み付けられて扱かれる。

最初は甘んじて受け入れていたその行為だが、延々と続く内にわたくしは「しつこい！」と痺れを切らした。ドンドンと胸板を叩けば、ンフフフと不気味な笑い声が聞こえてくる。

「——ぷはっ♡」

「ハッ、はあっ、はあ……！」

やっと解放された時には、舌がちよつとジンジンしていた。

わたくしは変態をじつと睨み付け、変態はデレッツと頬を緩める。

反省の色が見えない。どこまでも幸せそうだ。

「えっとお、脱がせますねえ……♡」

「……ふん」

名残惜しそうにわたくしの顎を舐めていたセオドアだったが、睨み続けている内にやっと体を起こした。

手を引かれたわたくしはツンとした表情で引き上げられて、寝台の上に座り込む。

「ま、まずはガウン……♡」

「……するなら早くしてちょうだい」

震える手がちよつとずつ近付いてくる。

また躊躇うのかと目を眇めたわたくしを見て、セオドアはデレツと相好を崩した。

長い髪がぐちゃぐちゃに乱れているが、その美しさは損なわれていない。それが何だか、不公平だった。

だって寝起きで髪がぐちゃぐちゃなわたくしは、きちんと不細工

なのに。この男は寝起きすらも美しいのだろう。やっぱり不公平だ。

「あ、ふあっ♡えええ、エッチだあっ♡♡」

するりとわたくしの肩からガウンを脱がせた男が、大いに感激している。いちいち反発するのも疲れてしまうので、わたくしは溜め息だけ吐いて「よかったわね」と声をかけた。

「はいっっ♡これにして良かったですっ♡♡」

やっぱり貴方が選んだのね。そう、心の中で呟いて。わたくしはいつまで経ってもじろじろとわたくしの格好を見つめる男に、もう一度溜め息を吐いた。

このままでは初夜が終わるまでに、夜が耽るところか夜が明けてしまう。そのくせどうせ、完遂するまで離してもらえないのだ。

「ま、マイスウィート!？」

「いいから」

わたくしは自らネグリジェの裾を掴み、上に引き上げた。

スポンと首から抜けたシルクの布地。

その下から現れたのは、真っ白の総レースの下着だ。

大事な部分すら透けた、大変破廉恥な格好である。

物凄く恥ずかしいが、相手はどうせ変態だし。照れても損だと自分
分に言い聞かせる。

「あ、あゝゝ♡でちやううゝ♡ハニーが大胆過ぎて息子が暴発し
ちやううう♡♡♡」

「はいはい」

ほら、この通りだ。照れるだけ損損と心の中で繰り返して、わた
くしは脱いだネグリジェを膝の上に置いた。

特注品だろうそれを、駄目にしたくはない。わたくしは上質な生
地を傷めないように綺麗に畳んで、寝台の隅に置いた。

「あ、あ、あ、うちゆくしゅしゅ♡えへ♡神秘的なお姿あ♡♡♡」
わたくしの下着姿を凝視する変態が、顔の横で指を組んでクネク
ネと体を揺らしている。

良く見る光景だ。蕩け切った表情と相まって、どこか現実離れし
ている。怪異だと言われても納得出来るかもしれない。

愛を囁きながら身をくねらせて迫って来るヨダレを垂らした男―
―充分都市伝説としてやっていけそうだ。

「幸せそうねえ」

「はい♡♡♡しあわせれす♡♡♡」

わたくしの中でのセオドアの評価が、『どうしようもない変態』
から『仕方がない人』に変わりつつある。

もちろん変態であるのに変わりは無いのだが、こういう人なのだ
から仕方がないのだと、諦めの境地に達した。

しつこい執着男であつても、父の負債を肩代わりしてくれたのは事実なのだ。

つまるところ鬱陶しくて気持ちが悪いストーカー男から、気持ち悪いけど恩人である旦那様にグレードアップしたのである。

そう考えると、ものすごい株上げだ。

「もう、いつまでぼおつとしているの？」

声をかけると、けぶるようななまじ毛がふさふさと上下した。

翡翠の瞳はキョトンとわたくしを見ている。

「早くしないと、夜が明けてしまうわよ」

「……アツ、仰る通りですね！私としましてはこのまま朝までその玉体を崇め奉りたい所存でございますが……せつかくの御馳走ですかね！しつかりたつぷり、骨の髄まで味わい尽くさせていただけこうと思いますっ!!」

変態はじゅるっと唾液を啜り、何度も手の甲で口許を拭った。
わたくしはそんな男を見ながら、ヒクツと頬を引き攣らせる。
決してわたくしから目を離さない双眸は、尚も瞳孔が開いていて
若干血走っていた。

ゆつくりとこちらに手を伸ばしてくる変態の体から、ゆらゆらと
湯気が出ているような錯覚に陥る。

「あの……ッ！」

「……っ」

ガシツと両肩を掴まれて、ズイツと顔を寄せられる。

それからセオドアは恐る恐るといった様子で顎を引いて、上目に
視線を合わせてきた。

「おまんこ舐めて、いいですか……!?」

「……」

控え目な仕草に反して、声が大きい。そして主張も大きい。

わたくしはもう、溜め息すら出なくて。仕方ないわねえと心の中で呟いて、苦り切った顔で渋々頷いた。

圧倒されて、声が出なかったというのもある。

「ああ〜！ マイスウィートが自ら寝転んでえ〜！」

やかましい。そんなことを実況しなくていい。

わたくしは心の中でツツコミを入れながら、仰向けになって膝を立てた。

ふかふかの寝台に沈む体。

変態に気圧されていた体から、そっと力が抜けた。

「お——ッ」

「ん……？」

仰向けになったのはいいが、セオドアが動かない。

不思議に思ったわたくしが顔を上げると、変態はわたくしの左足を凝視して固まっていた。

「おみ、あしい……♡」

「……はあ」

これは長くなるぞと察して、わたくしはその足を持ち上げた。整ったかんばせの前に差し出されるわたくしの左足。

足首を使ってフリフリと爪先を上下に振れば、彼の首が合わせて上下に揺れた。

「かわ、いい♡」

歯を可愛いと言ったくらいだから、足も可愛いと言うんだろうな。そう思っていたら、見事に予想が的中した。

変態は下から包み込むようにわたくしの左足に触れて、壊れ物を扱うように持ち上げる。

「あむ……♡」

「んっ、……っ♡」

躊躇いなく親指を口に含まれて、僅かに驚く。

けれどわたくしは瞬きで心を落ち着かせ、そっと息を吐いた。

熱い口内に包み込まれた親指。

ねっとり舌が絡み付いて、丹念に舐め回されていく。

ぢゅく、ぢゅく、くちゅっ♡指先から、指の付け根にまで。舌が

当てられて優しく撫で擦られる。

「……っん♡」

爪にカツツと前歯が当たった。たったそれだけでわたくしは感じてしまっ——腰がゾクゾクとしたところで、親指をぢゅるっ♡と強めに吸い上げられる。続いて指の腹を舌の表面で撫でられて、それから指先をにゅるにゅると擦られた。

「はあ、ふう、おいしい……♡」

「あ、んんっ♡ん、う♡」

ぢゅるっ♡と音を立てて親指が吸い上げられ、彼の口が離れていく。終わったのかと視線を向けると、今度は隣の人差し指が口に含まれた。

「はふっ♡んむっ♡ちゅっ♡」

「ふう、ん……♡」

夢中で人の足の指を舐めしゃぶる美丈夫。

その表情は幸せに満ちていた。

焦点が合っていない瞳は熱に浮かされたように、蕩けている。

「んん♡んー……♡♡」

足の指に愛撫されているわたくしよりも、口で奉仕をしている彼の方がよく声を上げている。

指の間に熱く湿った吐息がかかっていて、どうにも擦りたい。

「んむ、はふっ♡んぢゅ、ふうっ♡」

セオドアは無我夢中でしゃぶる指を変えて行って、やがて左足の小指まで到達した。すると今度は、わたくしの右足に触れる。

わたくしは仄かに苦笑しながら彼の手を受け入れ、左足を下ろして右足を上げた。

「ほんとうに、仕方のない、んッ♡ひと……」

「ハッ、ハッ♡あむっ♡んんっ♡♡」

右足も、親指から順番にしゃぶられていく。

彼の頭が振られ、口で指が上下に扱かれていた。

男性器に口淫をするかのような光景だ。そんな奉仕を目にして、じんわりと興奮が高まる。

指を咥えたまま足の裏にも舌を這わされて——右足もまた、小指

まで丁寧にしやぶられていった。

仕上げとして足の甲に口付けが落とされ、リップ音を立てながら右足がシーツの上へと下ろされていく。

やがて両足を寝台についたわたくしは、足首へと口付けられて、少しずつ少しずつ触れる位置を上げていく口付けを、素直に受け続けた。

「はあ、ッ、ああ、ハニー……♡」

「あ……、ふあ、んう……♡」

脛、脹ら脛、膝。どんどんと口付ける場所を変えていきながら、セオドアはしきりにわたくしのことを呼ぶ。

名前であったり、恋人を意味する呼称であったりと、いつも通り忙しない。けれどその声はいつもと違ってしつとりと深い、落ち着いていたものだった。

お陰でわたくしの胸は簡単にときめき、鼓動を刻むスピードを速めてしまう。

「あ、あ、あ……っ」

膝を外側に押されて、優しい力だったのにあっさりと開脚させられてしまった。

内腿に触れる柔らかくて湿った感触。ちう、と柔肌を吸われるとピリツとそこが痛んで、すぐにジンジンとした甘い疼きに変わった。

「ハニー……♡」

「あ、んっ♡」

膝裏に手を入れられて、両足とも上体に押し付けられる。

大きく開脚すると僅かに腰が浮いて、ハッとして下を見れば足のあわいに綺麗な顔が接近していた。

「くくくっ」

これは、さすがに、恥ずかしすぎる。

わたくしは直視することに耐えきれず、両手で顔を覆った。

喉で低く笑う声が聞こえてきたが、今は噛みつくことも出来ない。

まだ下着を身に付けているとは言え、左右の紐をほどけば簡単に脱げてしまう作りだ。その上、総レースの下着は透けている。有つて無いようなものだろう。

「……ハッ、はあっ、ん、むっ♡」

「きゃっ！ んう……っ♡」

大きく開いた左足付け根。そこにムニツと柔らかな感触が触れた。それは幾度もとなく足や唇、そして顔中に当てられた感触だ。

わたくしは目で確認せずとも、それがセオドアの唇だと理解した。

「あ、わ、えっちな、におい、する」

「……!! だめ、嗅いじゃ……っ!」

喋り終えるなり彼は、蜜口の辺りにピッタリと鼻先を当てた。それからすうつと鼻から深く息を吸う。

「ぶおっ♡はあ……♡すうー……っ♡」

「ひっ！だめ、って、言った、のに……！」

息を震わせながら、セオドアは何度も何度も秘すべき場所においてを嗅ぐ。あらぬところで深呼吸を繰り返す変態はグリグリと割れ目に顔を押し付けてきていて——わたくしのそこからは、ぐちゃぐちゃと音が鳴っていた。

「ああ、濡れてる。……はは、私で、ハニーが——濡れてる」

「あ……ッ！」

ぬろ、と薄い布越しに割れ目が擦られて。感じた熱に、腰が震えた。しかしもつと顕著に反応したのは、目の前の男だ。

彼は割れ目をひと舐めするなり、ブルルツ！と体を震わせた。

それから両腕でガツチリと、わたくしの太ももを抱え込む。

「おい、しい。あまい。いい、味がする。これが貴女の——蜜の味」
「あっ、アツ！ ああ、あっ♡」

ぬちよっ♡ペチャツ♡くちゅっ♡ぬちっ♡

舐め上げる動きが止まらなくなった彼の舌。何度も何度も割れ目を舐め上げて、鼻からフンフンと荒い呼吸を繰り返す。

「おいひい♡おい、ひいっ♡♡マイスウィートの、おまんこ♡愛液♡しゅごい、おいひいっ♡♡♡」

ペチャツ♡ペチャツ♡ぢゅぞっ♡くちゅっ♡

「ン、んっ♡ん、あっ♡は、あんっ♡んうっ♡」

セオドアは合間合間で感想を述べながら、下着の上からしつこく小陰唇をなぞる。下着越しであるのに生地が薄いせいで、わたくしには熱も感触も、つぶさに伝わっていた。